

西アジア・中東の新展開

今回学ぶこと

7世紀初めのアラビア半島で、ユダヤ教、キリスト教という一神教の系譜の上に、イスラームと呼ばれる新しい宗教が生まれた。今回は、まず、イスラームが誕生した経緯とその教義の概要を学ぼう。そして、この宗教がなぜ短い期間にアジア・アフリカ・ヨーロッパの広い範囲に広がったのかを考え、8世紀に建設されたアッバース朝の都バグダードの繁栄について知ろう。

調べておこう・覚えておこう

- キリスト教の教義についてまとめてみよう。そして、どこがイスラームの教義と同じか、どこが異なっているかを調べてみよう。
- 地図を見て、アラビア半島とメッカ、メディナ、ダマスカス、エルサレム、バグダードという都市の位置を確認しよう。
- 現代世界で、イスラーム教徒がたくさん住んでいる地域や国を探してみよう。

イスラームの教え

イスラームを創始したムハンマドは、この世は必ず終わり、その時、唯一の神による最後の審判が行われると語った。この点は、ユダヤ教、キリスト教と共通している。一方、最後の審判を経て楽園に赴くためには、ムハンマドに伝えられた神の言葉に従って生きなければならないこと、神はその言葉を人々に伝える最後の預言者として自分を選んだことも説いた。この部分は、ユダヤ教、キリスト教とは異なっている。ムハンマドの教えを受け入れた人々をイスラーム教徒（ムスリム）と呼ぶ。ムハンマドの死後にまとめられた『コーラン』には、ムハンマドを通じて下った神の言葉（啓示）が収められている。ムスリムは、できる限り啓示に従って生きることを求められた。

イスラームとユダヤ教、キリスト教は、いずれも唯一の神を信仰する一神教であり、教義にも多くの共通点がある。ムハンマドは、『聖書』に現れる預言者とその言葉を認めただけで、自分

が最後の預言者だと語った。3つの宗教はよく似ているがゆえに、現在に至るまで信徒たちの間で争いが絶えないともいえるだろう。

イスラーム世界の拡大

ムハンマドの死後、ムスリム共同体の指導者はカリフ（後継者）と呼ばれた。正統カリフとウマイヤ朝カリフの時代にかけて、主としてアラブ人ムスリムからなる軍隊が、東は中央アジアや北インドから西はイベリア半島までの広大な空間を征服した。「聖戦」という強い目的意識を持ち規律正しいアラブ人ムスリムの軍隊は、無敵だった。西アジア・中東の強国だったササン朝ペルシアは滅び、ビザンツ帝国はエジプトやシリアを失った。ムスリムの支配者は、異教徒に課せられる人頭税を支払えば征服地の住民が旧来からの信仰と儀礼を維持することを許した。このため、彼らは多くの場所で「解放軍」として迎え入れられた。しかし、支配者であるムスリムと被支配者の非ムスリムとの間には、人頭税以外にも様々な差別があった。また、新たな政治や社会の仕組みは、イスラームの考え方を基本として整備された。このため、被征服者の人々の中で、イスラームに改宗する人の数が次第に増えていった。

アッバース朝とバグダードの輝き

8世紀に成立したアッバース朝カリフ政権は、ティグリス川のほとりに新しい都バグダードを建設した。これが今日のイラクの首都バグダードの起源である。バグダードは、カリフの居城を中心に置き、その周囲を官庁街が取り巻く円形都市だった。一般の住民は都市の壁の外に住み、各種の商品生産や商取引も主として城外の市場で行われた。この町を起点にして四方に伸びる交通網が整備された。陸上交通とともに水上交通が重要な意味を持ち、ティグリス川の河口に位置する港町バスラは、インドや東南アジア、中国へ向かう航海の拠点となった。強大な政治権力の拠点となったバグダードには、多くの富が集まった。また、機会を求めて各地から優秀な人材が集い、この町は学問や文化の中心地ともなった。イスラームに関する学問だけではなく、古代ギリシアやインドの知もこの地にもたらされ、それらが融合して新たな知が生み出された。

西アジア・中東は、ユーラシア・アフリカ大陸の各地を結ぶ陸と海の交通路の交差点に位置する。交通路が整備され、人、モノ、情報が自由に流れたとき、その交差点に位置する都市は大いに繁栄したのだ。